

伊勢商人川喜田好文の「読書控」から見る書物意識

Ise Merchant Kawakita Koubun's "Reading Note" and His Thoughts on Reading

早川由美

HAYAKAWA Yumi

キーワード…伊勢 興画合 書物意識 貸本屋

一、はじめに

江戸時代を通じて江戸と上方の文化を繋ぎ、資金的な援助も行っていたと思われる伊勢商人の書物意識を調査研究することは、地方知識人の文化活動を検証することにつながる。津の木綿問屋であった川喜田家は、江戸大伝馬町に江戸店、大坂や京に出店を持っている豪商であった。久太夫を名乗る代々の当主は文化的関心が深く、多くの文人や知識人と交流を持ち、蔵書家としても知られ、三都の書肆から多くの書籍を購入し、それを知人に貸し出したりもしていた¹。

『川喜田家歴史資料目録』²には商業資料の他に、川喜田家代々の記録や手控え、旅日記なども記載されている。その中から、これまでに十四代目川喜田久太夫石水が「見たき本」として、自らが読みたい本を書き留めた綴りについて資料紹介を行った³。また、俳諧一枚摺を中心に俳書についての概説を「伊勢商人の俳諧文化と蔵書形成―津市石水博物館俳諧一枚摺仮目録―」として報告した⁴。

本稿では、同目録の中から、石水の息子で十五代目川喜田久太夫を継いだ政豊（号好文⁵）の『読書控』の紹介と研究を通じて、幕末期の伊勢商人の書物意識について報告を行う。

二 川喜田好文「読書控」について

川喜田政豊（嘉永四（一八五〇）年～明治十二（一八七六）年）は、伊勢津の木綿問屋川喜田家十五代目久太夫である。号としてここに挙げた好文の他に、合歓磨・枕水・交水がある。幕末江戸で流行した興画合に関心を寄せ、注釈書を作成するなど、書物や文化に対する関心が深かった人物である。彼の年譜や号については、拙稿「十五代政豊の文事」で述べた。そこで紹介した興画合注釈書では「合歓磨」と書かれていたが、本稿では『読書控』表紙の印より「好文」と呼称することにする。

興画合とは、幕末期江戸の趣味人たちの間で流行した知的遊戯の一

つである。あらかじめ出された題を、それと明示することなく故事・古歌や芝居・読本などの素材の意を効かせて読み取らせる絵（興画）を作成し、その作意の高点を競うものである。興画を作るためにも鑑賞するためにも、和漢の故事・詩歌・芝居・読本など多彩な文芸に対する知識が必要である。好文作成の興画合注積書『くまなき影 盲人さがし』『結釈生類興画合解 やみのつぶて』には、引用書目録が付されている。そこに名前があるが、現在石水博物館に所蔵されていない読本などを、どのようにして閲覧していたのであろうか。その疑問に答えるのが、『読書控』であった。

『読書控』の中には、自家の文庫所蔵の整理番号が付された書物以外の、借覧した書物についてはどこから借りたのかが示されている。さらに、主に読本については、読後感想と思われる印もあり、幕末期の地方知識人の読書環境、書物意識を知る貴重な資料となる。

以下、本資料の書誌的事項について確認する。

〔表紙〕 「読書控（乾・坤）」表紙墨書直書 喜有多楼（墨書）好文（印）【図1】

〔整理番号〕 『川喜田家歴史資料目録』Ⅲ

ん—37—10—10—11

〔形態〕 半紙本仮綴 全二冊

〔丁数〕 乾二十一丁・坤二十三丁

〔記載内容〕

○乾の表紙見返しに、朱書きで「面白○
不面白□ 中吉△ 中凶▽」という印を付す。【図2】



図1 乾坤・表紙

図2 乾表紙見返し・一才

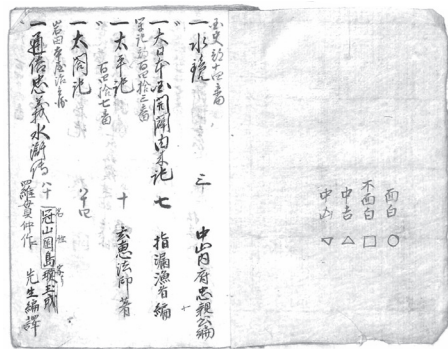


図3 乾9ウ・10才



○一丁表から、一つ書きで書名、冊数、編著者を書く。書名の右肩に朱書きで分類番号、借りた本については借出元を記す。【図2】

○書名や編著者については、本から読み取れた情報の他、『合類書籍目録』等で調べたことも注記している。冊数は墨書と朱書きが混在している。

○一部の書名について、行末に見返しにあった記号を付す。【図3】

書名の掲載順序は、乾では「国史」という歴史関連書から始まり、「軍記」、江戸名所関連書、読本を中心とする「雑記」、実録系の「随筆雑記」へ続く。続いて「岩田本治」「安久堂蔵書」といった所から借りた本が並び、再び文庫内に戻り「雑記」の浮世草子、随筆類、最後に「教訓」がまとめられている。巻末は「本治本」の「開巻驚奇侠客伝 五集」となっており、江戸の町と興画合関連という好文の読書傾向がわかる並びであるようだ。

坤は「類書」から始まり、『神代卷』や『五元集』など、興画合注釈書で引用された本が続く。その後は「随筆」「雑記」がばらばらと続き、「仏書」「柏原蔵書」という仏教系の本、続いて「和歌」の部がまとまって記載されている。

両書共に、著者編者などは、原本を確認していることがわかる記述となつているものが多く、実際に書物を手に取り開いてみた記録である。

三 「読書控（乾坤）」掲載書一覧

以下は、『読書控』中の掲載書を、掲載順ではなく所蔵場所別番号順にまとめた表である。個人の読書の歴史として掲載順も大事ではあるが、借り出した本と自家所蔵分の分類でまとめることによって蔵書傾向や分類意識を明らかにすることを優先した。

表の項目のうち、「所在」項目は、本の所在を示す。川喜田家所蔵分としたものは、例えば『水鏡』には「国史部第十四番」などと分類と番号が付されている。本表では番号順に配列したが番号は省略し、分類も「部」を省略した他、「風土」＝「風土記」、「漢類」＝「漢書集」、「漢類」＝「漢類書」、「随筆」＝「随筆雑記」、「絵」＝「絵双紙」、「歌附」＝「和歌部附録」とそれぞれ略称した。「無」は、分類の記載が脱けているものである。

後半の借りた本については、「安久」が興画合注釈に協力していた安久堂（竹馬）⁷、「本治」＝津岩田町にあった貸本屋本屋治兵衛⁸、「柏原」＝縁戚関係の京都柏原家⁹、江戸店である「築地」＝「築地蔵書」・「本店」＝「本店蔵書」、及び店関係者「永田」＝「永田蔵書」¹⁰・「久助」＝「久助蔵書」という名前があり、様々な方法で探書していた様子があるかがわかる。

伊勢商人川喜田好文の「読書控」から見る書物意識（早川由美）

「書名」「編著者」については、原本通りを原則とした。ただし、原本で列記された場合「同」という記号で省略しているが、所在別に配列した都合上、該当する書名・人名表記にした。朱書きの注は「一」、角書きや割り注は「一」で、黒字注は「（）」で示した。著者名の「撰」は、「撰」の上が空白になっており、原本から撰者を確定できず後から記入するつもりであったと思われる。

「冊数」は、黒朱の区別をせずに記載した。「記録」は見返しにあって記号が付されている場合にそれを記入した。

「現存」は石水博物館に当該書が現存している場合は○、現存が確認できない場合は×を付した。

「石水刊年」は、現存する刊本で刊記などから刊年がわかるものを記載した。空欄となっているのは、刊年不明本である。「備考」は、現存本についての注である。

【「読書控」掲載書一覧】

川喜田家所蔵分		冊数	編著者	記録	現存	石水刊年	備考
所在	書名						
国史	水鏡	三	中山内府忠親公編		○		
国史	大日本国開闢由来記	七	指漏漁者編		○	万延元年	
国史	大鏡	八	藤原為業入道編		○		
国史	増鏡	十	一条冬良公編		○		
国史	世継物語（小世継と号）	一	一名宇治大納言物語といへり		○		
国史	続世継物かたり（二名今鏡と云）	十	作者不詳		○	慶安三年	
国史	江談抄	三			×		
風土	江戸名所図会	二十	松涛軒長秋編輯		○	天保七年	
神書	神代卷	二			○	慶長四年 延宝四年	
漢雑	群籍一覧	一	老人転物作		×		

伊勢商人川喜田好文の「読書控」から見る書物意識（早川由美）

随雑	野翁物語	写本十																	
随雑	野語述説	八	壺峯仲允父輯																
随雑	俳優考	一	新井筑後守白石作	×															
随雑	大岡仁政録	写本十																	
随雑	大岡忠相比事	写本三																	
随雑	誹歌百一選	写本一	海壽翁著	○															
随雑	野夫談（春台が四十六士論の誤りを述べたる書なり）	写本一	横井也有著	○															
随雑	嘉多比沙志	前後六	斎藤彦磨																
随雑	開口新語	一	岡白駒著	○															
随雑	灯下戯墨玉の枝	一	森羅子著	○															
随雑	護国女太平記	写本一		○															
随雑	秋田杉	写本十		○															
随雑	慶安太平記	写本十		○															
随雑	明和風土記	写本二		○															
随雑	訓準笑話	一	津藩津坂東洋著	○															
随雑	分類故事要語	十	専庵静斎先醒輯	○															
随雑	扶桑隱逸伝	三	沙門元政著（名日政号不可思議）	○															
随雑	統近世崎人伝	五	伴高蹊著	○															
随雑	熊思孝著		伴高蹊著																
随雑	伴高蹊著		伴高蹊著																
随雑	八島五丘輯	五	伴高蹊著	○															
随雑	近世崎人伝	五	伴高蹊著	○															
随雑	熊谷蓮生一代記	七		○															
随雑	浅野四十六士論説	写本一	直方著	○															
随雑	赤穂義士伝	五	山崎美成校	○															
随雑	浮世床従初編式編迄	六	式亭三馬作	○															
随雑	浮世床 三編	三	滝亭鯉丈作	○															
遊	契情買虎の巻	一	田螺金魚著	○															
物語	竹取物語俚言解	二	佐々木弘綱著	○															
物語	校訂伊勢物語図説	三	市岡猛彦著	○															
物語	宇治拾遺物語	十五	宇治大納言撰	○	文政八年														

物語	今昔物語（井沢長秀改正纂補）	八	宇治大納言源隆国著	○															
物語	冠注大和物語	三	井上文雄著	○															
物語	源氏物語湖月抄	六十	北村拾穂軒季吟作	○															
物語	犬物がたり	写本一	千種黒沢歌問答	○															
物語	一休諸国物語	遺三		○															
物語	為愚痴物語	八	著（越後国）曾我休曾我休自作	○															
物語	白痴物語	二	六々園春足作	○															
物語	しみのすみか物かたり	二	石川雅望著	○															
物語	徒然草吟和抄	五	北村拾穂軒季吟	○															
物語	枕草紙春曙抄	十二	北村拾穂軒季吟	○															
物語	清輔袋草紙	四	重頼著	○															
物語	毛吹草	四	其角発句集	○															
物語	五元集	四		○															
物語	俳家奇人談	統とも	竹窓玄々一校	○															
物語	鶉衣 後編拾遺	四	蓬蘆青々山人著	○															
物語	鶉衣 前編拾遺	六	横井也有作	○															
物語	風来六部集（とんた噂の評・放屁論	二	平賀源内（鳩溪）作	○															
物語	後共・櫻陰隠逸伝・天狗鬮鑿鑿定縁起			○															
物語	里のをだ巻評																		
物語	笑堂福聚	一	山本北山先生戯著	○															
物語	念仏草紙	一	鈴木正三作	○															
物語	十善法語	十三	慈雲天和尚作	○															
物語	十善法語	十三	慈雲天和尚作	○															
物語	駟鞍橋	三	鈴木正三著	○															
物語	麓草分	一	鈴木正三作	○															
物語	大道和尚法語	一	大梅大道禪師作	○															
物語	飯名法語	一	沢庵和尚作	○															
物語	他力念仏丸能書並イロハ歌	一	釈知応著	○															

仏書	赤裸々	一	(京ノ人) 服部天游著			〇	寛延二年序跋	
仏書	遠羅天釜(統トモ)	三	(名患鶴俗姓長浜氏) 白隠禪師著			〇	寛永十一年	
仏書	夢中問答	三	夢想国師著			〇		
仏書	増補諸乘法數	二	姑蘇洞庭沙門行深編集			×		
仏書	二人比丘尼	一	鈴木正三作			〇		
仏書	盤球仏智禪師法語	一	大龍編			〇	宝曆八年	
仏書	三界一心記	一	親鸞上人作			×	万延元年跋	三経往生分類他合一冊
仏書	一念多念文意	一				〇		
仏書	觀無量壽經	一				〇	安永六年序跋	
仏書	如雲紫笛翁假名法語附録いろは歌	一				〇		
仏書	うすひき歌	一	盤球禪師作			〇	文政七年	
仏書	十善戒法語	一	散人翫山著			〇	文化十一年跋	
仏書	不思議問答	一	白木子著			〇	天保十三年	
仏書	命の親	一				〇	文政七年序跋	
仏書	かな法語	一	白隠和尚作			〇	宝曆七年	
仏書	夜船閑話(養生の書也)	一				〇	天明七年	
仏書	月庵大禪師假名法語	一			月庵和尚假名法語	〇	天明三年跋	
仏書	壁生草(附幼稚物語)	一	白隠禪師作			〇	明和七年	
仏書	開堤老翁辻談義	一	白隠禪師作			〇	明和三年	
仏書	水かがみ抄	一	(而温斎) 山岡元隣作		一休みずかがみ抄	〇	元禄四年	
仏書	鉄眼和尚仮名法語	一				〇		絵入り
仏書	一休がいこつ	一				〇		
仏書	一枚起請但信抄	二	桑門隆長述			×		
仏書	唯信抄	一	安居院聖覚法印作			〇	天保十三年	
仏書	西方指南抄	六				×		
仏書	安心決定鈔註解	八	法然上人作			〇	正徳四年	
仏書	教行信證鈔	十五	親鸞上人作			〇	貞享三年	

和歌	四十八願得聞鈔	四				〇		正定閣筆記	×
和歌	唱導三百年眼	三				〇			×
和歌	正信偈訓説図会	五	暁晴翁編述			〇	安政三年跋		
和歌	兩大師利生記	三	法龍著			〇	文久二年		
和歌	説法用歌集諺注	十	注者坂内山雲子			×			
和歌	釈教玉林和歌集	一	(信濃国人) 先啓著			〇	寛政十年		
和歌	孝行和さん・因果和さん・施行うた・ホコリタ、キ	一	引接寺法竜敬判			〇	天保十三年		
和歌	真如觀	一	源信和尚作			×			
和歌	永平発菩提心摘詠	一	道永禪師著			×			
和歌	倉松道詠集	一	道元和和尚歌集			〇	延享二年序		
和歌	拾芥抄	六	東山左府作			〇	寛永十九年		
和歌	古今類句	三十六	山本春正作			〇	寛文六年		
和歌	尾張の家つと	九	石原正明作			〇	文政二年		
和歌	美濃の家つと	八	本居宣長作			〇	寛政七年、寛政九年		
和歌	新選六帖	六				〇	万治三年		
和歌	古今和歌六帖標注	六				〇	天保十一年		
和歌	千々の屋集	三	作者不詳(平由豆流大人校定、山本明清大人校注、契沖・真淵校本)			〇	安政二年		
和歌	わかくさ	一	鶯蛙園有功卿作			〇			
和歌	現存歌選	四	海野遊翁大人撰			〇	天保七年、九初編二編		
和歌	草緑集	四	天野政徳撰			×			
和歌	霞関集	二	高田与清潤			〇	寛政十一年		
和歌	和歌渚の松	五	(佐渡奉行) 石野遠江守広道撰			〇	寛延元年序		
和歌	類題若菜集	二	觀山撰			×			
和歌	和歌八島の浪	二	積書堂光英撰			〇	天保七年		
和歌	下蔭集	七	橘守部(橘冬照)撰			〇	天保九年序		

和歌	門の落葉（後編共）	四	本居春庭・鬼島富 樞撰		○	文政元年序、 文政十三年序	
和歌	瓊浦集	二	中島広足撰		○	天保十一年	
和歌	千人一首	二	鬼島富樞撰		○	安政四年序	
和歌	五百重浪	一	本間游清撰		×		
和歌	月詣和歌集	四	賀茂神主重保撰 清水派臣標柱		○	文化五年跋	
和歌	小門の汐干	二	八田知紀撰		○		
和歌	調鶴集	三	井上文雄家集		○	慶応二年序	
和歌	類題草根和歌集	二	源躬弦大人抄		×		
和歌	類題名家和歌集	三	撰		×		
和歌	類題和歌浪花集	二	撰		○	天保六年跋	
和歌	類題稲葉集	二	中島宜門大人撰		×		
和歌	さきはひ草	二	井上文雄撰		○	慶応二年跋	
和歌	桂園一枝	一	景樹家集		○		
和歌	桂の落葉	四	景樹家集		○	天保十四年、 嘉永三年	
和歌	木積集	一	木島菅丸家集		×		五卷五冊
和歌	加茂翁家集	一	真淵先生家集		○	文化三年	
和歌	あつまふり	一	小池魚峰撰		○	文政十年跋	
和歌	三草集	三	松平定信侯家集		○	文政五年序	
和歌	あしの一葉	一	一渡忠秋・吉田利 和・吉田利純一家 集		○		
和歌	常盤集	三	山内繁樹大人家集 能代繁里訂正		×		
和歌	樞の若葉	二	鬼島富樞撰		○	文政十三年	
和歌	みやこ鳥集	二	八田知紀撰		○	嘉永七年	
和歌	当世百歌仙	一	興撰 （石見人）多田清		○	安政二年序	
和歌	垣ねの小草	一	八幡竹舎のよしの り撰		×		
和歌	摘英集	一	井上文雄撰		○	安政三年序	
和歌	桂の花	二	横山桂子家集		○	文久元年序跋	
和歌	菊園集	三	菊池柚子家集		○	文久元年序跋	

伊勢商人川喜田好文の「読書控」から見る書物意識（早川由美）

和歌	類題鯉玉集	十	撰		○	弘化二年	
和歌	紅塵和歌集	二	撰		○	文化八年	
和歌	新紅塵和歌集	二	撰		○	天保三年	
和歌	類題鴨川集	六	撰		○	嘉永五年	
和歌	類題武蔵野集	四	撰		○	安政四年	
和歌	詠史歌集	二	撰		○	嘉永六年	
和歌	草山和歌集（元政 上人家集也）	一	始石井平之丞元政 （仕彦根侯） 撰		○	寛文十二年	
和歌	夢窓国師御詠 上人家集也）	一			×		
和歌	仙国国師御詠	一			○	文政六年	
和歌	仙国師家集標注	一			○	写本	
和歌	沢庵和尚和泉百首 真砂集	一	久松祐之撰		○		
和歌	とは子詠草	三	氏 （三河國人）岩上		×		
和歌	秋山翁家集	三	秋山光彪家集		○	天保十三年序	
和歌	香取四家集（清宮 秀堅撰）	二	一樹取魚彦・永沢 躬輔・沢近嶺・椿 仲輔		○	嘉永五年	
和歌	泊泊舎家集	四	清水浜臣家集		○	文政十二年跋	
和歌	蓼舎集	三	中村良臣家集		×		
和歌	忍ふ草	五	八田知紀家集		○	弘化四年	三編まで
和歌	大江戸集	三	蜂屋光世著		○	安政七年跋	
和歌	安政年々歌集	二	西田惟恒輯・ 五十君夷守校		○	安政二年、五 年	
和歌	可々楼年々百首	六	川本延之家集		○	嘉永六年、安 政六年	四編抜け
和歌	もとかしは	二	木曾游清家集		○	嘉永二年序跋	
和歌	けふりの末	一	香習尼家集		○	文政十三年序	
和歌	藤かつら	二	齋藤真蔭家集		×		西嶽公御 集
和歌	西嶽公御朗吟集	一			○	写本	
和歌	小林歌城歌集	四			×		
和歌	麦の舎集	一	高島式部家集		○	慶応四年跋	
和歌	うけらか花	八	芳宜園千蔭家集		○	享和二年・ 文化五年	

和歌	あつまうた	三	加藤枝直家集			享和二年	
和歌	歌林尾花末	五	撰			元禄十六年	
和歌	○江戸名所和歌集	二	蜂屋光世著			文久四年	
和歌	薄水 歌合	一	香川景樹判			天保六年	
和歌	琴後集	七	村田春海歌集			文化七年序	
和歌	佐喜草	二	島山梅軒家集			天保八年序	
和歌	柳園家集	二	海野遊翁家集			嘉永三年	
和歌	橘守部家集	三				嘉永七年跋	
和歌	荻居集 前後	六	黒沢翁丸家集			安政四年	
和歌	しのすたれ	一	中嶋広足家集			嘉永六年	第二集
和歌	黄中詠草	四	香川氏家集			嘉永四年	
和歌	柿園詠草	二	加納諸平家集			嘉永六年跋	
和歌	雲錦翁家集	四	季鷹家集				
和歌	藤園雜歌	四	松田直兄家集			弘化四年	
和歌	浦の塩かひ 拾遺と	七	熊谷直好家集			弘化二年序	
和歌	桂園一枝 拾遺と	五	香川景樹家集			嘉永三年	
和歌	桂花余香	一	香川景樹作		×		
和歌	新百人一首	一	芳宜園千蔭著			享和二年跋	
和歌	百人一首一夕話	九	尾崎雅嘉著			天保四年	
和歌	伊勢の家土産	三編迄	井上文雄作			安政五年序	
和歌	詞の玉緒	七	本居宣長作			元治元年序	
和歌	玉あられ	一	本居宣長作			天明五年	
和歌	続歌林良材	二	下河辺長流撰			寛政四年	
和歌	歌林良材	一	一條兼良公著			天和二年	
和歌	和歌梨本集	二	戸田茂睡著		○	慶安四年	
和歌	にひまなひ	一	岡部真淵作		×		
歌附	狂歌奇人譚	前後六	八島定岡著			寛政十二年	三編まで
歌附	四方のあか	二	大田南畝著			寛政七年	
歌附	燭夜文庫	二	金鶏狂文集			寛政八年序、 寛政十二年	首尾二冊

無	釈教題林集「赤傍線」		随道軒浄惠著			宝曆九年	
無	めなし草(水か、みとも云)	一	一休上人作			天保二年	
無	純無名抄		一時軒作			延宝八年	
無	源氏湖月抄発端						
無	鑑囊鈔		金剛仏子行營述				二十卷一十冊
借りた本	小夜風物語	十	井原西鶴著				
安久	百馬鹿	三	式亭三馬作				
安久	戯場訓蒙図会「五六七八」	二	式亭三馬作				
安久	「妙竹林話」七編人	五編迄	梅亭金鶯著				四卷十二冊(初編欠)
安久	「滑稽本」千社参	四編迄	梅亭金鶯著				四卷八冊
安久	「滑稽本」和合人(三編追加迄)	十二	滝亭鯉文作				
安久	「滑稽本」江の島土産	三	十返舎一九作		△		
安久	鈴木主水栄枯録	写本前編五					
安久	武辺咄聞書	写本三					
安久	武辺断「節標列男」	写本五					
安久	赤穂義士伝一夕話	五	山崎美成著				
安久	太田道灌雄飛録	六					
安久	扶桑皇統記図会	五					
安久	朝日奈巡鳥記(六編より以下著述なし)	三十	曲亭主人著				
安久	「朝日奈巡鳥記」七編	五	松亭真水著				この行末書き後補
安久	「近世怪談」霜夜星	五	柳亭種彦著				
安久	双蝶記	十	山東京伝著				
安久	「美濃旧衣」八丈綺	六	曲亭馬琴作				

本治	三国一夜物語	八	春水校合	▽	×		
本治	新累解脫物語	五	曲亭馬琴旧作 別人校合	▽	×		
本治	頼豪阿闍梨怪鼠伝 （標注その、雪（後編の著述なし））	前巻六	校合	○	×		
本治	〔枕久松山〕柳巷話 〔枕久松山〕物語	初輯五	曲亭馬琴旧作 別人校訂春水補綴	▽	×		
本治	勸善常世物語	五	曲亭馬琴旧作 別人校訂春水補綴	△	×		
本治	俊寛鳥物語	十	曲亭馬琴旧作	○	×		
本治	近世説美少年録	九編迄 四十五	曲亭馬琴作	○	×		
本治	絵本西遊記	四十			×		
本治	幼婦孝義録〔石井恒衛門〕	十		▽	×		
本治	合邦辻	十		▽	×		
本治	優曇華物語	七	山東京伝著	▽	×		
本治	夢相兵衛胡蝶物語	前後九	曲亭主人著	○	○	文化六年、七 九年	
本治	繪本千里敷（落し書）	五	花枝房門馬作	□	×		
本治	浮世風呂	四編迄 十二	式亭三馬作	○	○	文政三年（初） 文化十年（四） 編十二冊	
本治	箱根ぐさ	四編迄 十二	為永春水作	△	×		
本治	雑談紙屑籠	四編迄 六	十返舎一九作	△	×		
本治	人真似目覚旅路	三編迄	永楽舎一水作	□	×		
本治	毛	二五	十返舎一九著	○	×		
本治	世中貧福論（滑稽に不有）	三	十返舎一九著	□	×		
安久	中将姫一代記				×		
安久	石言遣郷	六	曲亭翁作		×		
安久	松浦佐用媛石魂録	十五	曲亭馬琴作	△	×		

本治	〔木曾義仲〕鼎臣録 初輯・二輯	十	狂言堂瀬川如皐著	△	×		
本治	〔木曾義仲〕鼎臣録 三輯・四輯	十	狂言亭為永春水著	△	×		
本治	濡燕栖傘雨談	十	曲亭馬琴校合・ 黒川亭雪丸著	○	×		
本治	青砥藤網模稜案	十	別人校訂 馬琴著編旧作	△	×		
本治	大内興隆十杉伝	五編迄 廿五	為永春水著	○	×		
本治	南柯の夢	七	曲亭馬琴作	○	×		
本治	〔占夢南柯〕後記	十	曲亭馬琴作	○	×		
本治	善知安方忠義伝 冊	前編八	山東京伝作	△	×		
本治	善知安方忠義伝 二冊・三編	十	松亭金水編	△	×		
本治	本朝醉菩提〔福妻表紙後編也〕	前後十	山東京伝作	△	○	文化六年	
本治	高木廻実伝	二輯迄	松亭金水著	△	×		
本治	〔天然徳瓶〕仙蛙奇録	十 十五	為永春水著	△	×		
本治	糸桜春蝶奇縁	十	曲亭主人著	×	×		
本治	開卷驚奇俠客伝	四集迄	曲亭主人著	×	×		
本治	四天王剽盜異録	廿三	曲亭主人著	×	×		
本治	復讐奇譚稚枝鳩	前後十	曲亭翁作	×	×		
本治	開卷驚奇俠客伝五 集より（朝夷巡島 記六編の趣向をと り）	五	（萩原伝通）菘園 主人編次	×	×		
本治	通俗忠義水滸伝	八十	冠山岡島璞玉成先 生編訳・羅貫仲作	×	×		
本治	金剛宝戒釈義章		黒谷沙門源空草	○	×	明治三年政豊 写	
本治	鼠雀問答	二			×		
本治	真宗意得鈔（七部 聖教之内）	一	蓮如上人		×		
本治	因果鈔（七部聖教 之内）	一	存覚上人		×		

柏原	信行一念鈔（七部聖教之内）	一	蓮如上人				×		
柏原	念仏往生義（七部聖教之内）	一	蓮如上人				×		
柏原	三身六義（七部聖教之内）	一	覚如上人				×		
柏原	本願信心鈔（七部聖教之内）	一	存覚上人				×		
久助	肝要集（七部聖教之内）	一	存覚上人				×		
築地	三十大千世界録	写本三	沙門大円誌						
永田	本朝水滸伝（一名吉野物語）	九	建部涼俗吸露庵綾足著				×		
永田	田舎莊子	内編四 外編六	丹羽佚斎樗山述				×		
永田	諸家高名記	十五					×		
永田	三道一致領解抄	写本一	作者不詳（浄土宗の人の作也）				×		
永田	通俗醉菩提（道齋禪師一代ノ事跡ヲ記シタル書ナリ）	八	天華藏主人述・碧玉江散人訳				×		
永田	一休晰	五					×		
本店	通俗漢楚軍談		意峯徴庵編				○	元禄八年	十五卷二 十冊

四 好文『読書控（乾坤）』の分析と研究

（1）雑記（読本・滑稽本・浮世草子）・物語類

『読書控』から読み取れる好文の読書の特色の第一として、安久堂や本屋治兵衛から借りた読本と滑稽本類が挙げられる。

『読書控』二冊に掲載された四四〇件あまりの書名のうち、国文学研究資料館の国書データベースで「読本」に分類されるものは五八点、蔵書の内にあったのは十五点なので、興画合注釈書作成の時に使用した書物の多くを借りて読んでいることがわかる。「滑稽本」「咄本」の二八点でほぼ半分を安久堂と本治から借りている。読後感想がついて

いるのは、読本と滑稽本がほとんどであり、好文が好んで読んでいたのはこの二種類の書物であったといえるだろう¹¹。修業のため下った江戸で触れた興画合という知的遊戯に熱中して取り組んだ様子が見える。

「読本」の中では、石水が「見たき本」で挙げていた『春雨物語』がないことが注目される。上田秋成について、父石水、祖父遠里共に注目していたことがわかっている¹²。石水の「見たき本」で『春雨物語』と並んでいた『本朝水滸伝』は築地店から借り出して、乾の一丁表に記載されていることと考え合わせると、秋成は好文の興味の対象からは外れていたようである。逆に、石水が取り上げなかった「和訳太郎」の作品『諸道聴聞世間猿』と『世間妾形氣』（著者名の「和」が脱字となっている）が挙げられていることに注意したい。『諸道聴聞世間猿』は「教訓」に分類されており、青山英正が紹介している竹内弥左衛門に近い感想¹³を持っていたのではないだろうか。

石水博物館には浮世草子がほとんど現存していない。『読書控』にある『国姓爺御前軍談』の他には『野沢名所焼蛤』『出世握虎昔物語』『新薄雪物語』、川喜田家由来ではない『好色伊勢物語』、写本である『義経倭軍談』の六点のみである。しかし、『読書控』には「雑記二二四」に気質物を中心に十四種が掲載されている。好文の『読書控』への記載の仕方を見ると、『国姓爺御前軍談』は合戦を描いた作品という意味で「軍記」に分類されており、序にある「作者近松門左衛門」をそのまま著者として記している。亀友作の『世間姑気質』は「永井堂亀友」とし、『風俗俳人氣質』は「兵作堂亀友」としているのは、それぞれ序に書かれた署名に依っている。『国姓爺御前軍談』同様に、気質物類も目の前の本から得られた情報を基本として書いていることがわかる。安久堂から『小夜嵐物語』を借りていることなどからも、浮世

草子に分類される作品にも関心があつたことがうかがえる。

「物語」に分類されているものは、『竹取物語俚言解』『校訂伊勢物語図会』（考訂）今昔物語』『冠注大和物語』『源氏物語湖月抄』といった注釈書類である。「宇治拾遺物語」は絵入り刊本だが、中古の作り物語は注釈付の書物で読むのが基本であつたのだろう。石水「見たき本」では、『狭衣物語』『落窪物語』としかへばや物語など作り物語が広く網羅されていたが、好文は古典物語をある程度絞り込んでいるようだ。この「物語」分類には、『枕草紙春曙抄』『徒然草吟和抄』なども含まれており、読本や浮世草子など「雑記」分類とは違う「古典」という扱ひだつたと思われる。

(2) 国史・軍記・伝記・随筆雑記

『読書控』が「国史」という分類から始まっているのは、石水「見たき本」と近い。『大鏡』を始めとする四鏡や『世継物語』『江談抄』という説話や物語で歴史を理解しようという姿勢がうかがえる。

しかし、「見たき本」と異なり『古事記』や『日本書紀』といった作品はなく、古代の歴史は『大日本開闢由来記』を充当しているようである。神学系書物も少なく、鈴屋門であつた遠里や宣長の著作をいくつも挙げていた石水とは明らかに違う選択が行われている。

分類に関して、「見たき本」では「国史」に分類されていた『太平記』が「軍記」となり、『太閤記』や『武將感状記』と並んでいる。川喜田家の先祖に関わる「北畠物語」もここに挙げられているが、遠里が熱心に集め、石水が「南朝学」と別項目を立てた南朝関連書は掲出されていない。この『読書控』は、後に『先祖考証』を編集する好文にとつて、父祖代々の学問とは別の形での読書のあり方を示したものである。

「伝記」に『近世畸人伝』『百家奇行伝』などと並んで山崎美成の『赤穂義士伝』と『浅野四十六士論説』（著者に「直方」とあるのは、所収

伊勢商人川喜田好文の「読書控」から見る書物意識（早川由美）

されている「佐藤直方」の名前を採つたものと思われる）がある。「みたき本」では「義士モノ」という項目を立てて『忠臣実記』『赤城義士伝』『誠忠義臣伝』『内侍所』などを挙げていたが、ここに挙げられた書名は『読書控』にはなく、義士物は実録で読むものではなく、まとまつた読み物として読んでいたのだろう。

一方、実録写本作品である『大岡仁政録』『慶安太平記』『明和風土記』などは、「随筆雑記」に分類されており、平賀源内の伝記である『平賀国倫実記』などもこの分類に入っている。「随筆雑記」は『耳袋』『当世武野俗談』『窓のすさみ』『野翁物語』など当代の逸話を集めた書物が分類されており、興画合に当代の逸話が使われているため、まとめて読むものとされていたのではないだろうか。

(3) 仏書

鈴木正三の作品を中心にした仏書は、「見たき本」と共通するものが多い。柏原家から借覧した本はすべて仏書であり、中には『金剛宝戒釈義章¹⁵』のように、「明治三庚午歳玄月菅原政豊謹写」の奥書を持つ写本がある。この写本が含まれる現「二二四」箱前後に『読書控』に挙げられた仏書がまとまっている。石水の「見たき本」とは鈴木正三、白隠作品を中心に、仮名法語類など十七点が重なっており、仏書に対する興味関心が共通していたように見える。

しかし、好文は「結釈生類絵画合 上巻」（仮名垣魯文序・慶応二年（一八六六）という生類と經典とを題とした興画合の注釈（「結釈生類興画合解 やみのつぶて」）を作っており、そのために仏書が多く取り上げられている可能性もある。『説法用歌集』や『釈教玉林和歌集』『傘松道詠抄』など釈教関連の和歌集等も『読書控』の特色である。

注釈『やみのつぶて』は上巻のみを取り上げており、下巻¹⁶は慶応四年序を持つもので、好文・合歌麿の名がある興画各一枚¹⁷も存在する。

絵師名として鶴川・南溟・山齋・琴谷・藍泉・永海・寛一・晴湖などの名が見え、交来や有人・角美など『くまなき影』にも投稿している趣味人たちの興画合「下」に加わるために仏書類が必要となり、この『読書控』で多く取り上げられている可能性も高い。

(4) 和歌・俳諧

『読書控』の和歌部には、類題集及び個人家集も含め江戸期歌人の歌集が多いことが目を惹く。八田知紀や千種有功の家集は、石水が山本榕室書簡の中でも話題にしており、同時代歌人に対する興味関心は共通している。逆に、「見たき本」にあつた「万葉学」という『万葉集』注釈書類は挙げられていない。それだけでなく、石水が挙げていた『詠歌大概』『桐火桶』や『井蛙抄』『耳底記』などの古典歌論書類の名前もない。

『読書控』中の最新の歌集は文久四年（一八六四）刊の『江戸名所和歌集』、個人家集としては文久元年序跋を持つ『桂の花』（横山桂子家集）『菊園集』（菊池柚子家集）になる。好文は、父と同じく井上文雄に歌を学んでいたと考えられ、文雄編の『伊勢の家づと』は三編（文治元年・一八六四）まで現存している。他に、香川景樹・松田直兄・賀茂季鷹・中島広足・八田知紀など当代の歌人の家集がそろっており、当世の歌を知るための読書と思われる。類題集が多いことは、興画合で利用される古歌を調べる他、当代の和歌を知るためでもあつたのだろうか。

一方、俳諧に対する興味はほとんどないと言つてよいだろう。語彙を知るための『毛吹草』、伝記として読む『俳家奇人談』、俳文集である『鶉衣』『風来六部集』が分類されており、純粹な俳書は興画合注釈書で引用した其角の『五元集』のみである。

(5) 茶道

好文の長男で十六代久太夫である川喜田半泥子は、自ら茶碗を焼き

茶を楽しんだ。父である石水は表千家の住山楊甫や十一代千宗左と交流を持ち、茶会にも参加している。祖父の遠里は堀内宗完と親しかったように、川喜田家は代々茶道に造詣が深い¹⁸。「見たき本」には多数の茶書が掲載されており、石水自身が書いた茶会記なども現存している。しかし、『読書控』には茶道関連書は一つも記されていない。

(6) 本書の成立年代

この『読書控』に掲載されている最も新しい書物は、『江戸名所和歌集』『伊勢の家づと』『さきはひ草』という歌集の元治元年（一八六四）である。好文は明治四年（一八七一）に家督を継いで久太夫となる。石水博物館に現存している政豊の写本はこの年までのものが多く、安久堂との書簡のやり取りも明治四年で終わっている。

本書は、家を背負う前の好文が興画合などの趣味に没頭出来た時期の読書の記録であり、江戸下りした慶応三年（一八六七）から明治四年までの間の読書記録であると考えられる。興画合引用書に挙げられた書名のうちで石水博物館に現存せず、この『読書控』に出て来ないものは、『軍法富士見西行』『釈迦八相倭文庫』『新編水滸画伝』の三点のみであることもその証左となろう。

五 好文『読書控』に見る書物意識のまとめ

拙稿で石水の「見たき本」目録は石水がまだ若い頃の「趣味の読書のためではなく、自己形成のための基礎教養としての読書を目的とする目録」ではあつたとした。それとは真逆な形で書き集められたのが、好文の『読書控』である。国学や茶道など父祖が学び読んで来た書物の名前が挙げられておらず、興画合で引用利用した読本や仏書が多く並んでいる。

『読書控』中の文庫にある「隨筆部」「仏書部」の書物については、『政

豊随筆』(三冊)『好文(齋)随筆』(十一冊)『枕水筆のすさび』(八冊)に、教訓や歴史、語彙、説話などのテーマに合わせて抜粋してまとめられている。楠正成に係る物語も四書からの抜き書きも、『驅鞍橋』など仏書からの抜き書きもあり、教養として仏書を読む姿勢が感じられる。これらの随筆の後半部は明らかに明治期に書かれており、『読書控』よりも後の読書記録のようである。

このように、祖父である遠里や父石水が三都の書肆に依頼して探書し集めた自宅の文庫にある書物を利用して学習することは、好文にとつて当然のことであった。それ以外に、自らが知りたいこと、読みたい本を知人や貸本屋から借り出して読むという読書方法を取っていたことがこの『読書控』から見えてくる。それは興画合を中心とした江戸粋興連たちとの交流のための読書であった。それは、興味を持った書物を集め、次にはその作者の伝記を集めたくなるといような本の蒐集家であった遠里や桂窓¹⁹とは、異なる目的での読書のあり方である。

伊勢商人である好文は、修業時代を除いて地元津にいななくてはならない。慶応三年(一八六七)元服して九月に初江戸下りした好文政豊は、この年に刊行された『くまなき影』などを通して、粋興人たちの知的遊戯「興画合」に出会った。書物の知識を使った遊びであるこの「興画合」を理解しその仲間に加わるために、好文は必要な書物を短期間で読まねばならなかった。好文の『みちのき』(皿一37―5)という旅の記録によれば、慶応四年閏四月には江戸を立てて横浜見物をしたり、八橋や熱田をめくったりしながら、伊勢・上方への旅をしている。そのまま伊勢に戻ったのか、再び江戸での修業が続いたのかは確認出来ていないが、安久堂竹馬書館から明治三年(一八七〇)には伊勢に戻っていることがわかっている。わずか数年の江戸生活で触れた新しい文化、趣味に好文が熱心に取り組み、書物を読み漁っていた様子が『読

書控』からうかがえる。

好文にとつて、浮世草子の気質物類や滑稽本などは趣味としての読書を楽しむものであり、「随筆」や「仏書」は趣味と学習を兼ねる書物である。古典物語類は注釈書で読み、和歌の古典を読むよりも当代の歌人の家集で今の歌を知ること力点を置いている。俳諧はほとんど読まれておらず、「興画合」に出てくる其角の『五元集』だけであることなど、選ばれている書物は、「今、自分が関心を持っていること」にかなり限定されたものである。滑稽本好きであった好文は、俳諧ならば也有の『鶉衣』、源内の戯文などの滑稽味と洒落な文章が好みだったと思われる。

伊勢で暮らしても、津の本屋治兵衛が江戸時代の貸本屋の基本図書である読本²⁰をしつかりそろえていたことよつて、安久堂から借りた読本などと合わせて、「興画合」の読み解きや作成ができた。好文『読書控』は、幕末から明治へと変わっていく激動の時代、江戸の数寄の文化が伊勢の地にしっかりと根付いていたことも読み取ることが出来る点でも貴重な資料である。

本稿は、二〇二三年三月京都近世小説研究会例会に於ける口頭発表で紹介した資料の一部である。

貴重な資料の翻刻と紹介を許可いただいた石水博物館に感謝申し上げます。

- 1 二〇一五～二〇一九年度科学研究費補助金研究課題番号(15H03183) 研究成果報告書『伊勢商人の文化的ネットワークの研究—石水博物館所蔵書簡資料をもとに—』(二〇二〇年三月・研究代表者 青山英正)。
- 2 津市教育委員会・一九八九年三月。
- 3 拙稿「資料紹介 川喜田石水「見たき本」目録・近世期地方知識人の書物意識」(『叙説』四五号・二〇一八年三月・奈良女子大学日本アジア言語文化学会)。
- 4 『愛知淑徳大学論集—文学部篇—』四十八号・二〇二三年三月。
- 5 安久堂竹馬書簡宛名に「よし文」とあるが、「好文齋隨筆」の表紙の中には「こおむ齋隨筆」と書いたものがある。
- 6 「十五代政豊の文事—興画合注釈の作成—」(『二〇一八～二〇二一年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究成果報告書 石水博物館所蔵資料を中心とした伊勢商人の文化サロンに関する総合的研究(研究課題番号18K00299)』(研究代表者 岡本聡・二〇二二年三月) 及び、「くまなき影」興画注釈—川喜田家十五代目政豊の文事—」(二〇二二年五月・『東海近世』三〇号・東海近世文学会)。
- 7 注6の二つの拙稿で政豊と竹馬の交流について述べた。
- 8 国文学研究資料館蔵書印データベースに「津岩田町本屋治兵衛」印がある。「本屋治兵衛(本治)」から借りた書名で、石水博物館に現存する本にはこの印がないので、別書店から買い求めた物と思われる。
- 9 政豊の叔父にあたる鞘之助が、京都柏原孫左衛門の養子となっている。
- 10 江戸店関連書簡の差出人・宛名に「永田」姓が複数人ある。「久助」も店関連書簡に出る名前であり番頭ではないかと思われる。
- 11 『滑稽本の控』(二日庵合歓磨) という横本の仮綴じ目録が皿ん37—8にあり、合歓磨(好文)がこのジャンルを好んでいたことがわかる。
- 12 青山英正「伊勢の文化的ネットワークと『春雨物語』の流通・桜山文庫本の旧蔵者正住弘美をめぐって」(『雅俗』一八号・二〇一九年七月・雅俗の会)。
- 13 青山英正「伊勢における『春雨物語』の貸借—石水博物館蔵川喜田遠里宛竹内弥左衛門書簡をめぐって—」(『明星大学研究紀要—人文学部—日本文化学科』・二〇一八年三月・明星大学)。
- 14 遠里の南朝関連書の収集については、注6と同じ報告書の桐田貴史「北畠氏の歴史考証と川喜田家の蔵書—齋藤拙堂『伊勢国司記略』を事例に—」に詳しい。
- 15 国書データベースによれば『金剛宝戒釈義章』と『金剛宝戒秘訣章』は刊年不明の「金剛宝戒章」の内に含まれる。『法然上人全集』(宗粋社・一九〇六年)の真偽未詳の附録に翻刻が収められている。石水博物館には政豊写の「下巻秘訣章」のみが現存する。
- 16 『結釈生類経画合序品 下』という書き題簽を持ち、装幀も同じものである。
- 17 好文名の興画の得点は二十一点。「山斎(葛飾為斎)」の絵で中国風の老人と蕨を描く。「伯夷叔齊」の物語で生類は「鹿」だと思われる。合歓磨名の興画の得点は四十一點。「寛一(荒木寛一)」と絵師の注記があり、描かれているのはもっこふんどしを巻いた地藏で「笠地藏」の岩手などにある話形ではないかと思われるが、生類は何か未考。

- 18 科研費調査報告展図録『伊勢商人川喜田家への手紙―数寄のつな
がり―』（令和二年二月・石水博物館）。
- 19 遠里と小津桂窓の探書の様は、菱岡憲司責任編集『石水博物館蔵
小津桂窓書簡集』（二〇二一年・和泉書院）の菱岡解題に詳しい。
長友千代治「尾張大野屋惣八の蔵書内容」（『近世貸本屋の研究』
昭和五十七年・東京堂出版）。
- 20

